

途別小学校の研究

I. 研究主題

「ひびき合い、新たな学びを探究する子どもの育成」
～ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を通して～

II. 研究主題設定の理由

1 今日的な教育を取り巻く情勢

(1) アクティブ・ラーニングの必要性について

平成20年の学習指導要領改訂では、学校教育法第30条第2項に示された「基礎的・基本的な知識及び技能」「それらを活用するための思考力・判断力・表現力、その他の能力」「主体的に学習に取り組む態度」の、いわゆる学力の三要素から構成される「確かな学力」の育成を目指す教育課程の編成が全国的に進められてきた。その中で全国学力・学習状況調査の結果等から、北海道の児童生徒の学力が課題となり、各校における様々な学力向上の取組が行われた結果、習得にかかわる問題については改善傾向が見られるようになった。その一方で、習得した知識・技能を活用して問題を解く力の定着については、喫緊の課題となっている。

今の子どもたちが将来成人して活躍する頃の社会は、少子高齢化による生産年齢人口の減少や、価値観の違いから様々な課題が生じるグローバル化の進展等により、構造的にも環境的にも大きく様変わりすることが予想される。このような社会の中で必要とされる資質・能力の育成に関連して、OECDが提唱するキーコンピテンシーの育成や、ユネスコが提唱するESD等が実施されているが、共通点は「ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子どもたちが基礎的・基本的な知識・技能を習得するとともに、実社会の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要である」という視点である。

新しい時代に必要となる力を子どもたちにはぐくむためには、「何を知っているか」から、「知識を活用しどう解決するか」へ求める資質・能力を転換し、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視することが重要であり、課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」を推進することが必要である。

(2) アクティブ・ラーニングへの入口として・・・授業のユニバーサルデザイン化

文部科学省の調査によると、平成23年5月1日現在、義務教育段階において特別支援学校及び小学校・中学校の特別支援学級の在籍者並びに通級による指導を受けている児童生徒の総数の占める割合は約2.7パーセントとなっている。また、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、高機能自閉症等、学習や生活の面で特別な教育的支援を必要とする児童生徒数について、平成24年に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の結果は、約6.5パーセント程度の割合で通常の学級に在籍している可能性を示している。

「障害者の権利に関する条約」を踏まえ、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える「共生社会」を目指し、障がいのある者と障がいのない者が共に学ぶ仕組みである「インクルーシブ教育システム」の理念のもと、特別支援教育を推進していく必要がある。

「インクルーシブ教育システム」においては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、

個別の教育的ニーズのある児童に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる多様で柔軟な仕組みを整備することが重要であり、小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意しておく必要があるとのことから、道教委は校内研修プログラムを作成した。

全国的にもこの「インクルーシブ教育」実現に向けた具体的な授業・学習デザインとして「授業と学習のユニバーサルデザイン」の視点が広がってきている。それは、①学級全ての子どもが、②授業・学習に積極的、主体的にかかわり、互いを尊重し合う互恵的な学びを目指す授業・学習のことで、子どもたちの能動的な学習を生み出す手立てとなり、アクティブ・ラーニングへの入口となるのではないかと考えた。

2 本校の現状と昨年度の成果・反省から

本校の研修は一昨年度まで、2年計画で「知識を深め、自分の考えを広げようとする子どもを目指して～ICT 機器等の効果的な活用を通して～」の主題のもと、ICT 機器等を効果的に活用し、視覚的に訴える魅力ある教材開発の工夫と、その効果的な指導法のあり方について研修を深めてきた。

ICT 機器等を効果的に活用し、「見通し」や「振り返り」、「確認」、「類型・比較」や「分析・整理」等の学習活動を重視した授業を展開することで、児童の興味・関心の高まりや子どもの理解を深める点において一定の成果が見られた。

(1) 本校の現状

昨年度新たに研修をスタートさせるにあたり、本校の現状に関するアンケートを実施した。また、一昨年度の反省をふまえ、児童の実態を整理すると、「知識や技能を身に付けるために、真面目に一生懸命に取り組むことができるが、それらを活用したり、発展させたりするのが苦手である」「日常的にはのびのびと元気に過ごしているが、人前で話す力を高める必要がある」等の課題が見えた。これらの課題を踏まえ、習得した知識や技術を次の新たな学びにつなげ、探求する力を育てること（活用する力）、そして学んだことを適切に「話す」力を育てる授業づくりを目指し、研究主題を「ひびき合い、新たな学びを探究する子どもの育成」と定めた。

以上の2つの力を高める授業づくりを目指すにあたって、副題として「～ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を通して～」と定めた。「ユニバーサルデザインの視点」とは、「全ての子にとって参加しやすく、わかりやすい授業」のことである。さまざまな児童がいる中で、どの児童にとっても「参加でき、わかる」授業となるように、ユニバーサルデザインの視点に沿って①課題や発問を提示し、児童が新たな学びを探究するために焦点化できるようにすること、②ICT等の活用によって教材を視覚化させること、③対話など話す活動を取り入れ、児童の思考が共有化されること等の授業改善を図ることによって、児童は「新たな学び」を探究し、活用力を身に付けることができるのではないかと考えた。

(2) 昨年度の成果と課題

【成果】

昨年度1年間の研究成果は、「焦点化」においては、単元・1単位時間の教師のねらいがしっかり焦点化していると、子どもは何を考えると良いのか理解しやすいことが実感できたこと、課題提示の際に「何を」「どのように」するかによって子どもの反応が良くも悪くもなることが実感できたことである。「視覚化」については、模造紙や大型モニターなどで、子どもたちが情報を一斉に見られたので、学力差があっても授業に全員が参加できていたこと、視覚的な提示で、言葉だけの説明より子どもが理解しやすくなったことが実感できた。「共有化」については、ペア学習や少人数グループの話合いを経てから全体交流をした方が

学習内容の理解に有効であることがわかり、意識して日頃から話す機会を取り入れたことで、4月よりも話す技術は高まったことである。

【課題】

課題は「視覚化」の面で特に多く挙げられた。視覚的教材を作成すること自体が目的となっ
てしまいがちで、子どもにとって情報過多にならないよう何を視覚化するかを精選する必要
があること、ICT機器のトラブル対応、教師のICT機器の扱いの未熟さなどが挙げられた。

同様に「共有化」のための話し合い活動も、形式的なものになっていた、単なる「発表」
に終わっていた、という声があった。

全体にかかわる反省として、ユニバーサルデザインが日常的に行われ、それが全校的に見
えると良いということ、ユニバーサルデザインを「目的」とするのではなく、これを手立て
に子どもが「主体的・協働的」な姿になることを目指していくべきだという意見が出た。

(3) 今年度の重点

昨年度の反省と研修計画第2年次を踏まえ、今年度は、以下の2点を重視した授業づく
りを目指していく。

1つ目…ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を基本とし、教材研究の際に指導内
容を精選し、子どもの思考を「焦点化」させること、何を「視覚化するか」厳選す
ること、子ども同士の考えを、目的をもって「共有化」させることを重視した授業
づくりをしていく。

2つ目…子どもが習得した知識や技能を生かしながら「主体的・協働的」な学び【ア
クティブ・ラーニング】型授業へと発展できるような活動を取り入れること。

以上を踏まえ、仮説に沿った授業をすることで、子どもたちが協働的に学ぶ「ひびき合い」
と、主体的に学ぶ「新たな学びを探求する子どもの育成」を図ることができるのではないかと
考える。

Ⅲ. 研究の仮説

| | |
|-----|--|
| 仮説1 | ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業をすることによって、全ての の子にとって参加しやすく、わかりやすい授業となり、習得と活用につな がるのではないかと考える。 |
| 仮説2 | 見通しをもって活動に取り組み、その活動を学びに結び付けるための話し 合いや振り返りを行うことによって、主体的・協働的な学びにつながるの ではないかと考える。 |

Ⅳ. 研究教科

全教科・全領域

Ⅴ. 研究の内容

- 1 理論研修により授業のユニバーサルデザイン化とその効果について理解し、授業実践の中で能動的な学習とのつながりを追究する。
- 2 ユニバーサルデザイン化した授業を計画・実施し、教職員で参観・交流する。
- 3 児童の振り返りの記録や発話等により、アクティブ・ラーニングとのつながりについて分析する。

VI. 研究計画・・・3カ年計画

1 第1年次

- (1) 研究主題, 仮説, 研究内容などの決定
- (2) 授業のユニバーサルデザインについて…理論研修
- (3) 授業実践, 検証
- (4) 1年次のまとめ

2 第2年次(本年度)

- (1) ユニバーサルデザインとアクティブ・ラーニングのつながりについて…理論研修
- (2) 授業実践・検証
- (3) 2年次のまとめ

3 第3年次

- (1) 指導方法の工夫・改善
- (2) 授業形態の工夫
- (3) 幕別町複式教育研究会
- (4) 3年次のまとめ

VII. 今年度の研究・研修の日程

| 月 | 日 | 曜日 | 形態 | 研修内容 |
|----|----|----|----|---|
| 4 | 27 | 水 | 全体 | 今年度の共同研究について:概要 |
| 5 | 25 | 水 | 全体 | 理論研修① |
| 6 | 22 | 水 | 全体 | 提案授業事前研(西部学級) |
| 6 | 29 | 水 | 全体 | 授業研(兼研修講座「複式教育」授業公開)事後研 |
| 7 | 23 | 土 | 個人 | 個人研修期間 ~8月16日 |
| 8 | 31 | 水 | 個人 | 町教育実践交流会(札内東中) |
| 9 | 7 | 水 | 全体 | 授業研事前研(低学年) |
| 9 | 16 | 金 | 個人 | 町複式教育研究大会(古舞小) |
| 9 | 21 | 水 | 全体 | 授業研事後研(低学年) |
| 9 | 29 | 木 | 個人 | 全道へき地・複式研:希望者(渡島地区) ~30日 |
| 10 | 13 | 木 | 個人 | 管内へき地・複式研:希望者(瓜幕小) |
| 10 | 19 | 水 | 全体 | 授業研事前研(高学年) |
| 10 | 26 | 水 | 全体 | 授業研事後研(高学年)事前研(特別支援学級:中学年学級での支援の様子について) |
| 11 | 15 | 火 | 個人 | 管内サークル研:希望者(芽室西小・中) |
| 12 | 14 | 水 | 全体 | 授業事後研(特別支援学級) |
| 12 | 23 | 金 | 個人 | 個人研修期間 ~1月16日 |
| 1 | 13 | 金 | 全体 | 実技研(スキー:講師 十勝保健体育サークルat忠類) |
| 2 | 1 | 水 | 全体 | 今年度の研究のまとめと次年度の見通し |

○研修日は原則として、職員会議のない水曜日とする。行事などの関係で、別の曜日に実施する場合もあり得る。

Ⅷ. 全体構造図

